

むくみについて(1)

2015年7月28日

東洋医学では津液(しんえき)の滞留を浮腫みと考えています。そして「諸湿腫満は皆な脾に属す。」と言われるように脾の機能が円滑にいかないと津液の滞留を招きます。鍼灸治療では脾経の経穴を中心にして浮腫みに対応します。

以前にも触れたことがありましたが、現代医学に照応すると、おおよそ、津液は細胞内液と細胞外液(間質液、血漿)に相当します。津は陽的存在で、体内を自由に動き回る水蒸気のような軽いイメージの、体の役に立つ水です。呼吸や皮膚から発生するもので、気づかないうちに発散していると言えます。

液は陰的存在でどちらかという粘性があり、重いイメージの関節液やリンパ液などの体の役に立つ水と言えます。

東洋・西洋どちらの医学も共通して言えるのは、体の水の循環がうまくいかないと浮腫みが発生するという考え方です。

東洋医学では巡りを何よりも重視しますので、巡りが悪くなった時点で、体の役に立つ水は体に良くない水(水毒)として転化し、浮腫みを招くと考え、それを深い病を知らせる予兆として敏感に捉えます。

たとえば、整形外科的な捻挫や炎症による痛みを伴う浮腫みは、その原因が明白ですが、その他の原因不明の浮腫みは内臓疾患を伴う深い病が潜んでいるのではと捉えて、慎重な対応が必要になります。決して軽視することはできません。

また、浮腫みが全身に及ぶのかそれとも局所的なものかによって、原因の特定もだいぶ絞られてくると思います。

東洋医学では、浮腫みを主に脾の病として考えますが、派生的に腎、肺、肝、あるいは心の病として捉えて、経穴の反応を触診し治療していきます。

鍼灸の現場では下肢に浮腫みをもつ患者さんが多く見受けられます。単に下肢そのものに原因があるのではなく、背景には他の病が引き金になって起こる浮腫みが多い気がします。

両足が同じように浮腫んだ人がいれば、片足のみ浮腫みがでる人もいます。その中でもとりわけ不思議に思うのは、以前はどちらかといえば左足の浮腫みが目立っていた人が今度は右足にシフト替えするケースです。

今回は下肢の浮腫みに限定して、もう少し詳しく調べてみたいと思います。